

立教英国学院通信

第二六九号 二〇一五年三月一五日
 発行者 立教英国学院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
 GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

卒業終業礼拝

立教英国学院は三月七日に卒業終業礼拝の日を迎えました。四名の小学六年生は中学部に進学し、一五名の中学三年生は一名が高等部に進学。そして今年度は四三名の高校三年生が立教英国学院を卒業しました。

祝辞

立教英国学院理事

今井 雅啓

(伊藤忠欧州会社社長)

卒業生の皆さん、保護者の皆様、本日は卒業大変おめでとうございます。昨年の卒業式にも参加し、初めてこちらを訪問させて頂きました。この立教英国学院の素晴らしい立地、自然環境、設備に感銘を受けましたが、何よりも驚いたのは生徒の皆さんが非常に伸び伸びと、明るく、また礼儀正しく振舞われている様子でした。これも偏に棟近校長先生をはじめとする先生方の卓越した教育理念、指導方針、愛情、そして立教英国学院の長い歴史と伝統の賜物だと思っております。

本日は卒業生の皆さん、特に高校卒業の四三名の皆さんに三つ申し上げたいと思います。これから日本あるいはイギリスの大学進学を選ぶ方が多いと思いますが、大学に進まれても自分達が大変に恵まれた環境で、先生方とご両親の愛情に包まれて勉強をしてきたということを決して忘れないようにお願いしたい、という

ことを最初に申し上げたいと思います。

さて、私は二年前よりロンドンに商社の駐在員として赴任し、国際ビジネスに携わっている者でありまして、あと数年後には還暦、つまり六〇歳を迎えますが、外国で生活するということは、正直言って知らず知らずのうちにストレスの溜まることでもあります。何故、遠いイギリスで外国語で会話し、日本で仕事をするとともに比べものにならない苦勞をしなければならぬのかと、この二年間戸惑うこともしばしばありました。卒業生の皆さんも、お父様のお仕事の関係でイギリスあるいはヨーロッパに来られ、立教英国学院で学ばれた方が殆どだろうと思います。日本で生活したい、なぜここで寄宿生活しながら勉強しなければならないんだと、戸惑い悩まれた方も少なくなかっただろうと思います。

ただ、皆さんに二つ目に申し上げたいのは、苦しみ、悩みがあれば必ずその裏に楽しみ、喜び、良い事があるということです。生活の中で英語を学べるというのも一つですが、語学は技能、技術でありそれ自体が目的ではありません。もっと大事なものは英語を使って異なった文化、国籍、考え方を持つ人と知り合い、議論し、相手の考え方を知る機会を得ることです。異なった文化、思想、アイデアが存在するということが皆さん自身を成長させる大きな力になると思います。

私の好きな格言に *De la discussion, j'allie la lumiere* と云うものがあります。英語に訳すと *"The light comes out from*

the discussion"「議論から光が滲み出る」という意味です。異なった意見、多様性の理解、そういう人々との交流、議論こそが光、成長につながると思います。現在、大河ドラマで「花燃ゆ」という明治維新前夜の吉田松陰を取り上げたドラマをやっておりますが、卒業生の皆さんもこれからある意味、ご両親の庇護を離れ自分の意志と力で自分の人生を切り開く、言わば人生の明治維新に向って進んでいかれる段階とも言えるのではないのでしょうか。そういう大事なタイミングに、ここイギリスの伝統と文化、イギリス人の物事の考え方に触れながら勉強できたことを幸運だった、ありがたかった、と思われるようになります。吉田松陰は黒船に乗ってアメリカに密航し勉強することを望んでいましたが叶いませんでした。彼が皆さんの存在を知ったらさぞ羨ましがることでしょう。

三つ目に、私自身の高校時代から今に至る話を申し上げたいと思います。日本は狭い、ともかく外国に行きたい、海外と関わりのある仕事をしたい、外国で生活したいの一心で英語ばかりを勉強していたのが私の高校生活でした。当時の日本はまだ高度成長期にあり、言い方を換えますと、海外のものは優れている、日本は外国に追いつかねばならない、学ぶべきところは海外にあるという時代でした、いわゆる海外志向の学生が多かった時代ではなかったかと思えます。大学に入ってからは何故かフランス語の勉強をすることになりましたが、私の海外志向は益々強まり、フ

目次

	ページ
卒業終業礼拝	1～5
祝辞	1～2
卒業生スピーチ	3～5
退任された先生方	3
合唱コンクール	6
ロンドンアウトティング	7
短期交換留学	8～9
立教特派員レポート	10
学期末のミニ外出	11
UCL ロンドン大学との進学協定	11
第5回 チャブレンより	12

ランスに留学までしてしまいました。その一方で、最近イギリスで生活して思うのは、日本のことばかりです。日本の経済は大丈夫なのか、何故こんなことが日本で起こってしまったのか、何故イギリスやヨーロッパでできていることが日本でできないのか等々、日本頑張れ、という気持ちが増しに高まっています。立教英国学院で学ばれた皆さんは、将来の日本と英国の架け橋となる素材、候補生です。イギリスの空気に触れ、イギリスの文化に接し、イギリス人に囲まれて学んでこられた皆さんには、日本の国を更に良くするにはどうすれば良いか、イギリスのどういうところを学ぶ必要があるのか、あるいは真似をすべきでない悪いところはどこなのか、焦る必要はありませんが長い時間をかけて考えていって頂きたいと思えます。

簡単ではありますが、これで私の祝辞を終えさせていただきます。皆さん、本日は本におめでとうございます。

在英日本国大使館

総領事 川村 博司

本日はみなさんご卒業おめでとうございます。本日はすばらしい天気ですね。これも偏に、卒業される皆さんの日ごろの行いがいいからではないでしょうか。

私が立教英国学院について初めて知ったのは大学生の時です。当時、田舎の高校から出てきた私は、大学に入って仲の良い友人ができたのですが、彼が立教英国学院の出身だったのです。彼はびっくりするぐらい礼儀正しくて、頭がよくて、英語もできるのです。すごく格好がよくて、女性にも人気がありました。立教英国学院ってどんなところなんだろう、と思いました。卒業してから外務省に入り、また立教英国学院出身の方に出会ったのですが、この人もやはり、英語がペラペラで、頭もよく、格好もよかったです。立教英国学院ってすごいところだなあと思いました。

そして昨年、私は初めてこの立教英国学院にお邪魔し、色々とお話を伺い、校長先生をはじめとする先生方の教育方針が徹底されていることを知り、こういうところで勉強したら、あの友人のような人間に育つのだなと納得いたしました。英語がペラペラで、礼儀も正しく、頭がよく、人柄もすばらしい。これからみなさんは卒業されて、大学、社会へ出て行くと思いますが、ぜひ、立教英国学院の卒業生としての誇りを胸に、大学、あるいは社会で活躍されることをお祈りしております。

本日、私は二点、卒業するみなさんにお伝えしたいことがあります。これは私自身が、私生活の中で、また仕事の中で、常日頃から心がけていることであります。

一つ目は、常に新しいことにチャレンジするということです。みなさん、まだ、おそらく見たことがないもの、聞いたことがないもの、たくさんあると思います。常にチャレンジ精神を持って、挑戦していつ

欲しいと思います。新しいものを作り出すということとは、とても嬉しいことです。

二つ目は、難しいこと、できないこと、最初から諦めることがないようにしていただきたい、ということです。難しいと思っても、そこで諦めずに挑戦する。ぜひみなさん、最初からだめだと諦めないで、挑戦していつて欲しいと思います。

この二点をもって私からの祝辞とさせていただきます。みなさん、本日はご卒業まことにおめでとうございます。



Ambassador Award 2014

アンバサダー (Ambassador) とは「大使」のこと。アンバサダー賞は、地域との交流を通し、学校の代表としてふさわしい活動が続け、国際交流の分野において日英の架け橋となるような活躍があった生徒に、毎年地元ホーシャム市議会議長より贈られる名誉ある賞です。今年度は、高等部3年生の山本さん、高等部2年生の小野さん、鈴木さんの3名の生徒にこの賞が贈られました。以下、ホーシャム市議会 O'Connell 議長のスピーチを紹介いたします。

The Ambassador Cup is presented to the Students who have made a significant contribution to improving relations between the UK and Japan.

This year the award will go to three students: Mayu Yamamoto, Risa Suzuki and Mizuka Ono.

For the past three years Mayu has been heavily involved with the School's Japanese Evening – an annual event which introduces Japanese culture to local schools and the community. She also participated in the exchange programme with students from Wolverhampton Girls High School.

Mizuka and Risa have also demonstrated their skills at forming good relations between our two cultures through their participation in the Science Workshop at Cambridge University and Tohoku University last summer. In addition they supported visiting students from Tohoku who attended the workshop, as well as British students attending a briefing weekend here at Rikkyo School before travelling to Japan.



2013 年度短期交換留学より

卒業生スピーチ

小六 吉岡 美緒



今から二年前、五年生に進級するときに、私は、立教英国学院の小学部に入學しました。入學する前、初めて全寮制の学校だと聞いたとき、私は少し戸惑ってしまいました。なぜなら私はそれまで、家族から離れて生活したことがほとんどなかったからです。そして実際に立教に來てみると、本当に分からないことがばかりでした。そんな私を温かく迎え、生活の仕方を優しく教えてくださったのは先輩方でした。食事の席では、テーブルマナーや当番のときの仕事の行い方、ドミトリでは、シャワーの場所や洗濯日、そしてリネンチェンジの仕方を教えてもらいました。

初めは、自分だけでできないことがたくさんありましたが、少しずつできることが増え、だんだんと立教での生活に慣れてくることができました。まだ十分ではありませんが、今では自分のことだけでなく、他の人のことにも、気を配ることができるようになりました。

この二年間の立教での生活を通して、学び、経験し、身につけてきたことを生かして、私には、中学部へ進んだら頑張りたいと思っていることが三つあります。

一つ目は、来学期に入ってくる新入生の力になろうということです。四月から始まる一学期は、球技大会やジャパニーズインング、漢字コンクールやウインプルドン観戦など、たくさんの方の行事があります。慣れてないことやわからないことがいっぱいいる新入生の生活について、私が先輩方から

らしていただいたように、しっかりとサポートし、一緒に良い思い出をたくさん作りたいと思います。

二つ目は、今まで以上に勉強に真剣に取り組む、ということです。中学生になると、小学校の算数が数学に変わり、地理の勉強も始まります。今までとは違う教科が始まり、学習する内容も増えると思うので、計画的に物事を考え、時間の使い方も工夫して、より効率的に勉強できるようにしていきたいです。

三つ目は、続けてきた部活動を、これからも頑張ろう、ということです。私は立教に入學してすぐ茶道部に入りました。部活動紹介で、上手にお点前をしている先輩方がとても素晴らしくて、私もやってみたいと思ったからです。でも、いざ入部してみると、作法や道具の名前など、覚えなくてはいけなかったことがたくさんあって、くじけそうになったこともありました。そんな時にも、私を支えてくださったのはやはり先輩方でした。私も、先輩のように、茶道の素晴らしさを伝えることができるように、中学部に進んでも、しっかりと活動していきたいと思えます。

最後に、この二年間温かく見守ってくださった先生方、毎日食事を作ってくださった方々、校内をいつもきれいにしてくださった方々、本当にありがとうございます。中学生になっても頑張りますので、これからもよろしく願います。



退職された先生方

今学期をもって、以下の3名の方が退任されました。

東 牧雄先生（国語 40年勤続）、月見 紗枝子先生（英語 2年半勤続）、高野 聡子先生（社会 1年勤続）。長い間ありがとうございました。これからのご活躍とご発展を心よりお祈りしています。



さよなら立教スクール

東 牧雄

これが私の故里だ
さやかに風も吹いてゐる
あゝ おまへはなにをして來たのだと・・・
吹き来る風が私に云ふ

中原中也「帰郷」の一節、初めて高等部三年生を送り出した一九八一年十二月の終業礼拝、高三を送るスピーチの中で、君たちの戻ってくる場所、旅立つ原点としての立教を、思わずこう引用せずにはいられなかったのだ。それから三十数年を経て、先日三月七日の卒業礼拝、卒業生への合唱と演奏を聴き、卒業生スピーチを聞きながら四十年間の教師生活に今日で終止符かとの思いが湧いて來た。その瞬間、私はまた、「これが私の故里、ここが私の原点、立教が私を教師として受け入れ、四十年、私を教師とさせてくれたのだ」と、しみじみと感じさせられた。

ふるさととは何か、いつでも帰って來られる場所、いつでも温かく抱きかかえてくれるところ、であるとともに、おまへは何をして來たのだと叱ってくれる場所でもある。イギリスのパブリックスクールに底流として流れている『自由と規律』が、全寮制というハウスの中であらぬかかれて來ているような、そういう教育の原点が立教には脈々と受け継がれているのだと思う。卒業生を送り出すと、送り出したその時のままあの頃を共有できる空間、不思議な教育の現場を私は四十年経験できたこと、感謝に堪えぬ思いで「さよなら立教」と言うことにする。



中三 後藤 梨乃

二〇一二年四月私はこの立教英国学院にきました。ここへ来るまで私は、ただ「立教」という学校が好きで立教英国学院のDVDを見たり

していました。そんな私は、勉強が嫌いで地理なんかの宿題は一つも出してはいないくらいだったので、イギリスがどんなところかも分からないまま、ここ立教英国学院へ飛び込んできました。

入学式の日、冷たい風で灰色の雲、どうもここは私を快くは迎え入れてはくれないようだと思います。しかしそんな天候とは違って変わってやさしく迎え入れてくれた先輩や同級生、嬉しくてたまらなかったです。しかし私は、自分のことを語ることや表すことが苦手で、立教にすぐには打ち解けられませんでした。そんな私がここに立って自分のことを語っている理由は、この中学三年間で私は変わったと思っただけです。ここ立教でいくつもの私に出された課題を乗り越えてきたからそう思いました。また、今ここでこうしてスピーチをすること自体も私への課題であり、挑戦だと思ったからでもあります。

突然ですが、皆さんは大きな目標を持っていますか。私は持っています。他の人にとっては小さいことに感じられるかもしれないですが私にとっては大きな望みです。それは、人から求められる人になりたいということです。ここ立教では、先生と生徒、みんなが互いを求め合い、支え合って生活していると思います。ここへ来る前

の私は、自己中心的で求めるばかりの人、求められることがあまり無かった人で、でもここへ来て、私は変わることができました。一番のきっかけは、中学二年の時のオープン・デイでした。絵を書くのが得意な私は、背景・看板という仕事を任せられました。迫ってくる締切に苦戦している学級委員、私はクラスメイトから助けを求められました。

そこまで大したことだとは最初は思っていないませんでした。でも小さなことでもクラスの役に立つ、人の役に立つというのは私の心をきれいにしてくれるのだと思いました。

人を求めるといことは、この人だからこそ、という選択行為だと思えます。オープン・デイの準備期間、毎日身近にいるクラスメイト・担任の先生・私、この仲間だからこそ求め合い共に力を合わせられるのだと思いました。今年度のオープン・デイでは「自然からのメッセージ」という東日本大震災で被害を受けた原子力発電所についてという難しいテーマに挑み模造紙部門で一位、インパクト部門で二位をいただくことができました。難しいテーマだったので悩んだこともありましたが、そんな悩みを真剣に聞いてくれた先輩、仲間、先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。高校生になったら、そんな頼れて求められる先輩となり、みんなの役に立てる人になりたいです。

今まで相談に乗っていただいた先輩方、三年間担任をしていただいた金子先生やその他の先生方、元気づけて支えてくれた後輩のみんな、ありがとうございました。これからもここ立教英国学院で精一杯頑張っていきたいと思っています。



【3学期の行事】

- | | |
|------------|--|
| 1月10日 | 生徒帰寮 |
| 1月11日 | 始業礼拝 |
| 1月12日 | 高等部実力テスト |
| 1月18日 | 大学センター試験[英語]を全校で実施 |
| 1月24日 | 全校新春かるた大会 |
| 1月24日～31日 | Millais School からの交換留学生滞在 |
| 1月24日 | 実用英語技能検定 第一次試験 (準1級) |
| 1月25日 | 聖餐式、実用英語技能検定 第一次試験 (2級・準2級・3級・4級) |
| 1月25日 | 合唱コンクール |
| 1月31日～2月3日 | ブレイク |
| 2月2日 | ロンドンアウトイング |
| 2月3日 | 生徒会役員選挙 |
| 2月8日 | 第70回漢字書き取りコンクール |
| 2月22日 | 聖餐式、実用英語技能検定 第二次試験 (1級～3級) |
| 2月25日～3月2日 | 期末試験 |
| 3月7日 | 卒業終業礼拝 |
| 3月7日～3月14日 | Millais School、Thomas Hardye School にて本校生徒短期交換留学 |
| | 希望者ホームステイ |
| 3月9日～3月13日 | 高等部2年生補習 |





高三——宮下 春陽
私がここ立教英国学院に入学したのは、中学二年生の時でした。一学期のハーフトーム後という中途半端な時期に入ってきた私は、元からの人見知りだったって、自分から生徒の輪に入ることができませんでした。そんな私を、生徒の輪の中に引っ張ってくれたのは、先輩方と四人の同級生でした。そのお陰で、私はだんだん他学年の生徒とも接することに慣れていき、自分から輪の中に入れるようになっていき、自分が一気に増え、一日に笑う回数も増えていき、毎日がキラキラ輝いていました。

けれど、外部進学を選択した同級生と、高三生との別れの悲しみから、私の日々は色あせていきました。そんな私を変えてくれたのは、新入生を迎えて、よりパワフルになった同級生たちでした。いい意味で、何をやらかすか分からない同級生と過ごす生活は目まぐるしく、あつというまに二年が過ぎ、私は高校三年生になりました。皆と過ごす生活の、別れのカウントダウンが始まりました。いつまでもこの生活が続いていくと勘違いしていたせいか、皆との別れを自覚した頃には、もう終業式当日でした。自分の気持ちを整理できぬまま皆とお別れしたせいか、家に戻ってからふとした時に同級生のこと、先輩のこと、先生方のことを考えるようになり、止まらなくて眠れない日が続きました。在学中、先生方に不満を言って反抗したり、先輩をながしろにしていたのに、思い出すことは楽しかった日々ばかりで、自分が先輩のことが好きだったこと、先生方に見守られて、大切にされてきたことをやつと自覚しました。お別れしてから気付くなんて、私は馬鹿だなあと思いました。だから、「立教生活はつまらない。はやく家にかえりたい」と思っている子たちには、ここでの生活は決して窮屈でつまらないことばかりじゃないことを知っておいて欲しい。つまらないと思うなら、何をしても無駄だと最初から諦めないで、楽しいと思うようになるにはどうしたら良いのかを周りをよくみて考えてみて。自分ひとりで駄目なら、周りの友達や先生方を頼って一緒に考えてみて。それだけの信頼関係を、皆は築いているで



よう。たとえ今はまだ築けていなくても、これからの時間を無駄にせずにいけば大丈夫。そして、限られた時間の中でいっぱいここで生活を楽しんで欲しい。どんな小さなことでも、それまでと違っていることなら、それは大切な思い出になると、私は思っています。現に、いまの私にとって、ここでのちよつとした楽しかったことも辛かったことも、大切な思い出です。そろそろ、私のスピーチも、終わりが近づいてきました。先生方。反抗ばかりして、口では中々伝えることができませんでしたが、私は、先生方のことが大好きでした。迷惑ばかり掛けていましたが、今まで本当にありがとうございました。後輩たち。私に「先輩」として何が大切なのかを教えてください。皆には、さっきも言ったとおり、ここでの生活をつまらないものだと思わず、何事も最初から諦めないで、互いに思いやりながら、最後まで笑って過ごしていつてほしいです。これからも続く皆の立教生活が、実りのあるものになるよう、祈っています。そして、今日私と一緒にこの学校を卒業する同級生たち。私は今まで皆に支えられてきました。皆が私のことを「優しい」というけど、私が皆に優しくすることができたのは、皆が私にそうしてくれたからなんだよ。皆には、感謝の言葉をどんなにならべても伝えきれないくらい感謝しています。今まで、本当にありがとう。皆と一緒にこの学校で過ごせて、私は幸せでした。これからも皆が笑って過ごせることを、私は祈っています。今日をもって、私たちはこの学校を卒業します。今日まで、私たちを支えてくださった、先生方、先輩たち、ありがとうございました。皆と過ごした日々を胸に、私たちはこれからも前に進んでいきます。それでは、さようなら。





一月二五日、立教英国学院に素敵な歌声が響きました。全校合唱コンクールです。先学期の最後に曲決めを行い、新学期が始まったその日から本番日まで、どのクラスも毎日一所懸命練習してきました。その甲斐あって、学年、人数を問わずすべてのクラスがとても素晴らしい合唱を披露してくれました。

合唱コンクール

高一―二 柏樹 健生

学年最後の行事、合唱コンクールが行われた。皆は略して「合唱コン」と呼ぶ。

日本の学校によくある行事だが、この学校の記念すべき第一回は二年前の三学期だった。今年三回目の僕からしたら、ああまたかと思い、嫌だなあと正直思っていた。「合唱コンなくねれ」という声が聞こえてくる。その度に僕はそうだな、昨年などとは変わらない行事なのだろう、と思う。

クラスの曲は『栄光の架け橋』に決まった。その理由も、誰が出した案かも誰も覚えていなかった。ただ一つ覚えているのは、曲決めの話し合いは皆真剣だったことだ。冬休みを経て、三学期になる。三学期が始まって三日程して練習が始まる。毎年のことだ。三学期は何も大きな行事がないから作られた行事だと言うが、なんだかんだと忙しいのじゃない、面倒だと思う。毎年のことだ。練習が始まる。最初はまだ時間があると思い、適当にやる、僕らの俗に言う鉄板である。

そう思っていた矢先、いざ練習が始まってみると、三日後、いや、明日が本番であ

るかのような練習だった。皆が真剣に音と楽譜に向き合っていた。皆の心の中に優勝という文字があるのがひと目でわかった。嬉しかったというよりは、皆について行けるかという焦りの方が僕には大きかった。僕は歌は好きだが、自信はない。だからこそ、僕は僕なりに不安を解消できるような練習をした。こんな不安は僕にとつて初めてだった。

練習を重ね、本番前最後の週末が来る。その時にはもう僕の不安は無かった、と思う。初めて別々のパートで練習していた僕たちが一緒になって歌えるときに来ただ。感想はまだ一週間前なのに良くできていると思っていた。僕と同じ考えの人は多かったはずだ。でも、やはり不満はいっぱいあるようだった。その日から皆の色々な意見が出て、アレنجジするようになった。僕はというと少し、いやかなり余裕が出てしまった。練習時間にも、だらだらと歌っているだけだった。最悪だ。

本番の日を迎える。リハーサルには僕のやる気スイッチは入っていた。そのせいか、リハーサルで歌う度に完成度は上がっていった。夜を迎える。この時のために皆は三学期の初めから頑張ってきたのだ。精一杯のことをしてきた、と言えど嘘になると僕は思う。けれども、頑張ってきたのは事実だ。『栄光の架け橋』にある「いくつもの日々を越えてたどり着いた今がある」という所は僕にぴったりで、というのを誰かと話したことをステージ下で思い出した。足が震えるくらい緊張していた。だが、不思議と歌っている最中は冷静だった。表情だつてきちんと作れた。いや、作れたというより、自然にできていた顔だった。それくらい僕はこの歌に心を込めていた。ラストのパート、クライマックスへ移る。今までにない最高の声量だった。驚いた。団結していた。嬉しかった。

その後のブレイクで二組ほぼ全員が集

まった。最高だったと皆が口々に言っていた。そこから歌ったり、騒いだりしていたが、とても楽しかった。二組皆が団結していた、誰もが満足している顔が見られて、本当に良かった。今まで何度も二組で良かったと思う瞬間はあったが、これほどまでに思ったことはなかった。最高の思い出だった。果たして結果はどうなのだろう。いや、どうでも良いのだ。優勝なんて高二にあげてやる。

僕らにはそんなものよりも、「いくつもの日々を越えてたどり着いた今がある」ではないか。

美しい歌声が静かな教会に響き渡った

『栄光の架け橋』

二月一日、地元ラジウィック教会の日曜礼拝で、高等部一年二組全員で合唱を披露しました。

ラジウィック教会の日曜礼拝には、週ごとに交代で各クラスが参加しています。今週は高等部一年二組の番。今回の礼拝では英語での聖書朗読を立教の生徒が担当することになっていました。それに加え、今回は更に特別。礼拝の最後にクラス全員で合唱を披露する機会を設けていただきました。

高等部一年二組の合唱、『栄光の架け橋』は全校合唱コンクールで惜しくも優勝は逃したものの、多くの人を感動させ、高い評価を得ていました。クラスの生徒たちにとつても大きな経験になったようで、コンクール後に集めた作文には、「このクラスで良かった」「最後に団結して力を発揮することができた」と書かれたものが多くありました。

一方で、今年度の行事は全て終了、二ヵ月後には新年度のクラス替えでメンバー

はバラバラになってしまふという名残惜しさも、クラスの雰囲気からひしひしと伝わってきていました。そのような中、もう一度皆で歌える願ってもない機会を与えられ、生徒達の意気は昂揚していました。礼拝当日。お祈りが一通り終了してから、いよいよ出番となります。『栄光の架け橋』はもちろん日本語の歌です。そこで日本語の歌詞の英訳を、訪れたイギリス人の皆さんに配布しました。

ピアノの音色とともに、美しい歌声が静かな教会に響きました。合唱コンクールでも燃え尽きることがなかった生徒達のエネルギーが、礼拝に訪れた人々に伝わったようでした。

終わった直後、予想していなかった光景を観ることができました。聞いてくださった皆さんの温かい拍手とスタンディングオベーション。イギリスのミュージカルを鑑賞しているときなどに目にすることはありますが、生徒達自身がこの最上級の賛辞を受け取ったのは、ほとんど初めてのことであったのではないのでしょうか。

もう一度みんなでこの歌を歌うことができた。ラジウィックの村の人たちと心が通った。もうこれ以上は増えないと思っていた高校一年生の思い出が、またひとつ追加されました。





三学期のアウティングはロンドンへ出掛けます。小学部、中学部はサイエンスミュージアムへ、高等部は進学協定を結んだUCLロンドン大学へ。夜は、中学部三年以上の生徒はミュージカル鑑賞をします。楽しく学びのあった一日となりました。



ミュージカル「ウィキッド」

高一—— 末永 悠貴

僕はミュージカルが好きだ。特に宝塚が好きだ。「宝塚は実力不足」とか「お前はオタクか」とか言う人がいるが、そんな人は本当の宝塚を知らないだけだ。

宝塚の話はここまでにして、とりあえず僕はミュージカルを見るのが好きだということだけは分かっていたただけだろう。僕は母親がミュージカル好きだということもあって、生まれたときからミュージカルの音楽を聴き、そして歌っていた。声変わり



して音域が狭くなってしまった今は、歌うことがあまり好きではなくなっていました。僕が持っている音楽プレイヤーの中にも、ミュージカルの音楽が多く入っている。だから、そんな僕にとって、三学期のアウティングは楽しみで楽しみで仕方ない行事のひとつであった。

今回のアウティングで見たミュージカルは「ウィキッド」。僕は、この作品の内容は今回のアウティングがあるまで全く知らなかった。知っているとすれば、「緑色の魔女が出る」ということくらい。しかも以前、「ウィキッドはミュージカルとしてはイマイチな内容」という噂を聞いた事があったので、今回は楽しみにしていた反面、「ウィキッドなんか見て楽しいのかな」という気持ちがあった。ところがこの作品は、こんな僕の心配をどこかへと吹き飛ばしていった。

この作品は、かつては友達だった悪い魔女「エルファバ」と良い魔女「グリンド」の二人の魔女を中心に進んでいき、「世界を敵にさせた一人を愛した」エルファバと、「たった一人を失って世界から愛された」グリンドという対照的な二人の選択と、その心の葛藤を描いた作品である。その迫真の演技、圧倒的な歌の力が作り出す不思議な世界に、僕もどんどん入りこんでしまった。

今回のミュージカル鑑賞で、僕にとっていい刺激となったことは二つ。一つ目は、「英語で見るのができた」ということ。最初は聞き取ることが必死だったが、だんだんと耳が慣れていき、途中からは英語のジョークに笑えるようになっていた。見終わった後、「英語を聞き取れた」という自分への満足感もあったし、非常に良い英語の練習となった。もう一つは、主人公等の「女性」の演技と歌に刺激を受けた。日本の「宝塚」や「東宝」のミュージカルでよく見られるのは、どちらかというと裏声を多く使う「美しい女性」だ（そうでない場合ももちろんあるが）。だから今回のような「力強く」、「感情をむき出しにする」ような歌、演技は僕にとってはとても新鮮で僕も体の内側からなにかジワジワと来るものがあった。それはミュージカル好きのぼくにとってはたまらないものであった。今回のアウティングは非常に有意義で、思い出に残るようなものになった。来年は何を見るのだろうか。とても楽しみである。



く見られるのは、どちらかというと裏声を多く使う「美しい女性」だ（そうでない場合ももちろんあるが）。だから今回のような「力強く」、「感情をむき出しにする」ような歌、演技は僕にとってはとても新鮮で僕も体の内側からなにかジワジワと来るものがあった。それはミュージカル好きのぼくにとってはたまらないものであった。今回のアウティングは非常に有意義で、思い出に残るようなものになった。来年は何を見るのだろうか。とても楽しみである。



～短期交換留学体験記～

24th January - 31st January, 2015

ダンスのパフォーマンスが披露され、夕食後の食堂は大いに盛り上がりました。発表している生徒達から、一週間の間にバディ同士が心通わせる仲になったことがひしひしと伝わってきました。

一週間はあっという間に過ぎ、さびしい別れの時がやってきました。最初は話題探しが必要だった仲が、今では共通の話題がたくさんでき、話し足りないほど。次に会う約束をしてミレー生は帰っていきまし。春には、立教生がミレー・スクールにて短期留学をします。



短期交換留学

高一一二 岸田 和佳奈

今回、ミレー・スクールとの短期交換留学プログラムに参加して、たくさんのお話を学びました。その中で最も印象的なことを書きたいと思います。

一月二四日から、地元ホーシャムにあるミレー・スクールの生徒十名が立教英国学院に短期交換留学にやってきました。最初はお互いに緊張した様子のミレー生と立教生でしたが、それも束の間、みるみる距離が縮まってきました。

ミレー生には特別に日本の文化を知るプログラムも。茶道、書道、日本語講座、日本のポップミュージック紹介、抹茶クッキーづくりなど。どれも興味津々で活動するミレー生の意欲的な態度に立教生も刺激をもらうことができたように思います。

交換留学の終盤では、ミレー生と立教生バディによる発表がありました。ミレー・スクールと立教英国学院の違いについてのプレゼンテーションや、元気いっぱい

打ち解けていき、食事の盛り上がりは隣のテーブルに聞こえるほどで、時々怒られたりもしましたが、皆それぞれのバディとの距離がどんどん縮まっていたように見えました。そんな中、ミアと私の会話は相変わらず弾まないままでした。

彼女たちが帰る前夜、何かして遊ぼうと言っていたのですが、ミレーの子からの提案で「おしゃべり」をすることになりました。最初はみんな写真を見せ合ったり、歌ったりして楽しく過ごしていましたが、お別れの時間が近づくにつれて、次々に泣き出す子たちがでてきました。「離れたくない、ずっと立教にいたい」そう言うバディたちの言葉を聞いて、「私はバディの子に、『離れたくない』と思えるだけの何かをしてあげられたらどうか」と、ふとおもいました。答えはすぐに出来ました。そんなはずない。何にもしてあげることができなかった。きつと初めてここに着いた時、向こうも緊張していたに違いない。けれど、そんな彼女に私は何もしてあげられなかった。心の中から申し訳なさが溢れてきました。そんなとき、突然、彼女たちはドミトリーから何かを持ってきました。それは手紙でした。そこには大きく「私のバディになつてくれてありがとう」と書かれています。

こんな私なんかのために、何もしてあげられなかった私に手紙を書いてくれたこと、それは私の心に溢れていた申し訳なさを後悔に変えました。もつと話しかけてみればよかった、もつと仲良くなりたかった、あまりの後悔に涙が止まらなくなった私を、彼女は優しく抱きしめてくれました。その時のハグは、最初のぎこちなさとはかけ離れた、友人同士のハグだったと思います。

今振り返ってみると、最初にあまり話せなかったのは異文化や英語への恐れが理由だったのではないかと思います。そして

今回の交換留学プログラムは、「英国に住んで六年目になるし、異文化への恐れなんてもうとっくになくなっているものだ」と思い込んでいた私が、未だにそういった恐れを抱いていたということ、そんな恐れは早く捨ててしまったほうがよい、ということに気づかせてくれました。

この後悔、悔しさをバネに、次に交換留学でミレー・スクールに行くときは、人一倍皆としゃべってミアと仲良くなりたいと思います。



短期交換留学

高一——今田 宇咲

私はこのプログラムに参加することを希望したとき、かなり不安でした。正直、希望したことを後悔したことも何度もありました。その理由は、やはり英語を話す自信がなかったということだと思います。

結局、私はそんな不安を抱えたまま、ミレー・スクールの子との一週間の生活を迎えることになりました。第一印象、人をこれと判断するのは良くないと思いますが、やはりこれは大切だと思います。私はバディの子に笑顔で挨拶をしました。今思うと私はミレーの子達と過ごした一週間は、いつも以上に笑顔でいられた気がします。それはもちろん、彼女たちが楽しませてくれたということもありますが、私にとって相手に対し笑顔でいるということは、ひとつの礼儀だと思えます。相手が自分と話している時、表情によっては相手を不安な気持ちにさせてしまうかもしれません。そのほうがきつと相手も話しやすいし、多少は楽になるのではないかと思います。実際に、ミレーの子達も笑顔でいてくれたので、私も積極的に接することができました。

ミレーの子達と一緒に生活する日々は、私にとって、数年間の立教英国学院での生活に新しい風が吹き込んできたようで、とても新鮮で魅力的でした。しかし、彼女達は普段の私達の生活の忙しさに驚いていました。ミレー・スクールの話を聞いてみると、生活はもちろん、他にも設備や食事など様々な点で違いがありました。私はミレー・スクールに行った時、かなりの衝撃を受けることを覚悟しましたが、彼女達と過ごした一週間により、今はその気持ちに期待に変わりました。

私のバディだった子はとてもフレンドリーで、いつもなら私は自分から喋らなきやと焦ってしまうのですが、向こうからも沢山喋りかけてくれたので、会話をかなり

盛り上げることができました。少し日本語を教える機会もありましたが、彼女が私に英語を教えてくれた量のほうがはるかに多いと思います。

ミレー・スクールの子達は日本が大好きで、日本語を一生懸命に勉強しているようでしたが、やはり、かなり難しらしく、自国の言葉が日本語である私たちがうらやましいと言っていました。私にとっては多くの世界で使われる英語が喋れる彼女達のほうがうらやましいと思いました。

この一週間で、私は、英語に前より自信が持てるようになっただけではなく、彼女達が日本の魅力について沢山語ってくれたため、改めて日本語の美しさ、人柄の良さ、文化の素晴らしさに気づき、日本人であることを誇りに思えました。

春には、私がミレー・スクールに行きたいといういろいろなことを吸収しなければなりません。私がこのプログラムに参加した理由は、主に英語が喋れるようになりたいということでしたが、今は、それ以上に一人の生徒としてミレー・スクールに通い、新しい環境で、人との関わり合いや発見により自分を成長させるということです。もう語学の勉強のためだけではありません。私は今回の一週間での経験、これからの一週間での経験を無駄にせず、日々精進したいと思っています。



Message from the Millais

I have had a wonderful week staying at Rikkyo. The school is very different to my own and in my opinion, better. The school has a great sense of community and we were welcomed into the school immediately and looked after by everyone.

Rikkyo is a wonderful environment I wish I could stay longer. Everyone is so welcoming and kind I've had a very funny and interesting time. Thank you so much!

I absolutely loved my stay here and felt so welcomed. On the last day we were all very upset and didn't want to leave. It was a once in a lifetime experience and I would do it all over again!



I am very grateful to everyone at Rikkyo for being welcoming, friendly, kind and making us all feel at home. I didn't want to leave!



I really enjoyed my stay at Rikkyo as there was a lot of time to make friends in lessons. I also enjoyed cooking the green tea cookies as they were delicious and now I want to make some myself!

立教特派員

レポート

世界各地で様々な体験をする立教生。その様子を、今年度提出された休暇中の作文から紹介します。



冬休み

高二―一 池田 匠

冬休み。僕がブラジルに帰る最後の休みだ。春には日本への本帰国が決まっている。外国に居住している間、休暇の時には毎回旅行をしてきた。もしかすると、これが家族との最後の旅行になるのかもしれない。今回は六泊七日でブラジルの隣国、アルゼンチンへ渡った。

南米のパリと呼ばれる、アルゼンチンの首都、ブエノスアイレスから飛行機で南へ約二千キロメートル。ペリトモレノ氷河への拠点となるカラファテを訪れた。氷河の融解・再氷結のサイクルが早いことで世界的にも有名な氷河のひとつで、「生きている氷河」と呼ばれている。一二月―三月には氷の大きさほどの氷の塊が大きな音とともに一気に崩れ落ちる大迫力の瞬間を見ることが出来る。美しい巨大な氷河が崩れ落ちる様子は氷の塊が生きているということを体感することができ、自然のスケールの大きさを感じた。

クリスマスは南米大陸の南端、南極に最も近い「世界最南端の町」ウシュアイアで迎えた。この町にある世界一南に位置する鉄道「世界の果て号」に乗った。今では観光鉄道として人気のこの汽車は、かつては流刑地とされていたウシュアイアにあった監獄の囚人たちの手で建設され、一年中

必要な薪を切り出す作業のために日常的に使われていたという歴史があることを知った。

さらに船でビーグル水道のアザラシ、海鳥、ペンギンが生息している島々を訪れ、アルゼンチンの大自然を思う存分味わうことができた旅となった。

南米旅行を通して気付いたことは、日本では決して見ることでできない大自然の彫刻が数多く存在するということ。僕はそれらの絶景に魅了されていた。ほんとうに貴重な体験ができたと思う。



冬休み

高一―二 津端 万由

寒いイギリスから約一三時間のフライトを乗り換え、着いた国はシンガポール。生まれて初めて暖かい国で「冬」を迎えるのはとても変な感じがしました。

ヨーロッパではなかなか見られない不思議な色を組み合わせた数々のクリスマスオーナメントが町のあらゆる所に飾られていて、とても面白かったです。

こんな暑い中クリスマスと新年を迎えるのか、と思っていると母親から日本に一時帰国することが決まったという話を聞きました。毎年夏の間のみ一時帰国していた私は、十年ぶりに日本で冬を過ごすことになりました。

寒さは立教で慣れているはずなのに日本は想像以上に寒くて驚きました。

眠るときには暖房がないと凍ってしまいそうなくらい日本の寒さは甘く見てはいけなかった。いつもはテレビのスクリーンで観ていたイルミネーション、録画の紅白歌合戦も、自分の目でリアルタイムで観ることができ、大満足でした。

毎年日本で冬を過ごしている人達からしたら、どうってこともない事が私にとってはとても幸せなことで、何気ないことでさえ幸せを感じられるのがさらに充実感を上げてくれました。精一杯日本の冬を満喫してきたので、今度は三学期に新しい気持ちに入れ替えつつもイギリスの冬を満喫したいと思います。



社会学習を通して

高二―二 朝本 和志

この春休み、私は父の勤めている会社でアルバイトをしました。朝早く起きて会社へ行き、いくつかの雑務をこなして夕方に帰る。そんな生活を二週間、過ごしました。父が勤めているのは車の部品会社なので、いくつかの工場が隣接しています。アルバイト初日には工場見学もあり、様々な機械がせわしなく動いて部品を加工している様子も見せてくれました。コンピュータが自動で機械をコントロールして、精密にすばやく一つのものを作り上げる。一体どうすればこんなシステムを生み出すことができるのだろうか、と目を輝かせながら見てまわりました。

その途中で、案内してくれている人がふと一つの扉の前で立ち止まりました。そしてこちらを振り返って、顔をしかめながら何かを言ったのです。工場内の音でうまく聞き取ることができませんでしたが、何か良くない事を言ったのだということは伝

わってきました。その人が扉を開けると、中からものすごい悪臭がしてきました。聴けば、工場内のゴミを処理する場所だと言います。私は一秒でも早くここから出たいと思いました。正直、息もしたくない程でした。

しかし、悪魔はやはりいたのです。私は毎朝、その手伝いをしろと命じられました。もうこのまま抜け出して帰ろうかとも思いましたが、命令は命令です。私は重い足どりでその場所へ向かいました。

そこではおじさんが数人働いていました。その内の一人に、何をすればいいかと尋ねました。彼はマイクといい、まつ黒に汚れた作業着を着ていました。そこでの初めての仕事は、工場中にある捨てられたダンボールを回収することとなりました。集めたものはプレス機で一つの塊にして、リサイクルをしやすくするのだと教えられました。そしてこれからは毎日、ダンボールの回収をお前に手伝ってもらおうと言われました。

始めの内はまだ、こんな所で働きたくないとか、早く帰りたいとか思っていました。が、毎日マイクの顔や、周りの人達の接し方を見るに連れて、私の考えは変わっていききました。彼は自分の仕事に誇りをもっている。そして様々な人から信頼されている。ということに気付いたのです。普通であれば誰もが嫌がる仕事。ただし、全員のために誰かがやらなければならない。マイク達はそんな仕事を任されていたのです。

私は今までにこういう裏で支えている人達の作文を何枚も書いてきました。しかし、今回の体験でそんな人達の重要性を身をもって感じました。全員が心地よく生活するために、全員が楽しむことができるために、全員が笑うことができるために。私はその全員のための誰かになりたいと思いました。

学期末のミニ外出

3学期の終わり、小学部、中学部1年は立教の近くにある South Downs の丘へ外出しました。車の中では大きな声を出して楽しそう。少し時間が経つと期末試験の疲れもあってか眠ってしまう子もいました。

車で丘の上へ登ると、「わぁ、きれい!」「こんな景色、日本じゃ見られないよ」と感動し、隣で寝ている友だちを起こす姿も。天気に恵まれたこの日、丘の上からは遠くの景色まで眺めることができました。車から降りると少し風が強く感じられましたが、坂道、細い道、草や馬糞で足場の悪い道、そういったものを気にする様子もなく、楽しそうに歩き回り回ります。ちょうど良い丘を見つけるとみんなでジャンプをして写真撮影。「ポイントは足を曲げて飛ぶことだ」と先生に言われ、みんなで息を合わせてジャンプ!まるで空を飛んでいるかのような写真が撮れました。

丘から帰る時間になると「もう帰っちゃうの?」とまだまだ遊びたい様子。歩くことに疲れたり、土で汚れることを嫌がる様子もありませんでした。帰りに寄ったカフェではそれぞれ英語をつかって注文。クラスメート、他学年、先生と楽しそうに丘で時間を過ごす姿は正に大家族。すっかり春らしくなったこの日、イギリスの大自然と共に1年間の子どもたちの成長を感じました。



UCL ロンドン大学と進学協定を締結しました



1月14日(水)、UCL ロンドン大学(University College London-ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)の CLIE (Centre for Languages & International Education-国際教育センター)にて、立教英国学院と UCL-CLIE 間の進学協定の調印式を執り行いました。UCLは、オックスフォード、ケンブリッジに次ぐイギリスで3番目に古い大学で、世界大学ランキングでも常に上位に位置するトップクラスの大学です。29名ものノーベル賞受賞者を輩出しています。150年前に伊藤博文をはじめとする長州ファイブが日本から初めて留学し、その後の日本の近代化に大きく貢献したことで知られており、今年のNHKの大河ドラマの舞台となることでも現在注目を集めています。

この協定により立教英国学院の生徒で在学中に一定以上の成績を修め、規定の英語資格を取得した者はUCLのUPC (Undergraduate Preparatory Certificates-学士入学準備コース)へ推薦される権利を得ます。UPCは1年コースで、修了後はUCLの各学部へ進学が可能です。イギリスの学士コースは3年間ですので、合計4年間で学位を取得することができます。合わせて、今後立教英国学院はUCL国際教育センターと生徒の語学研修などでも教育連携を図っていくことが確認されました。また、協定締結に伴い、2015年度より教育課程に英国大学進学コースを設置し、イギリスをはじめとする海外の大学への進学を積極的にサポートしていく予定です。提携先の大学も今後順次拡大していきます。



チャプレンより



林チャプレンは立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業にはさまざまなお話をしてくださいます。

挫折の向こうにある喜び

チャプレン 司祭 林 和広

少し肌寒いながらも晴天に恵まれた三月七日、本年度の卒業式が行なわれました。四三名の高校三年生が本学院を旅立ちました。今回で二度目の卒業式礼拝の司式をさせて頂きましたが、その中で印象に残ったのは本学院理事である今井理事(伊藤忠欧州会社社長の祝辞でした。学生時代にフランス留学をし、長年、仕事を通して世界中を旅し、現在はロンドンを拠点にして仕事しておられる今井理事は、今でも海外での生活における苦しみや日本への望郷の念があるという体験を語りながら、今の苦しみの先にある喜びについて語って下さいました。

遠藤周作の「留学」という三本の短篇が収められた小説があります。カトリック教徒の遠藤氏自身のフランス留学体験が反映されているようですが、理想や希望を胸に抱いて、ヨーロッパに留学した三人の日本人が、言葉の壁、文化・慣習の違いからくる葛藤、その他様々なことに直面し、理想と現実の狭間で苦しみ、挫折していく姿が描かれています。海外で生活する機会を通して何度かこの小説を読み、自分の体験と重ね合わせていました。

私はこれまでに二度留学の機会を頂きました。一度目は大学二年の頃の米国短期留学、二度目は七年前の英国留学です。最初の留学は大学での前期の単位取得のためでしたが、日本人からの同級生も多く、さほど寂しさや苦しさを感ずることはありませんでした。しかし、二度目の英国留学は聖職志願し、司祭(牧師)になるための準備としての英国留学でした。歴史のある修道会によって創設されたアカデミックな神学校でしたが、周りは英国人ばかりで日本人は自分だけの修道院内にある寮生活、厳しい規律と学問生活は挫折の連続でした。神学用語の嵐に翻弄される日々であり、食事の席でも授業の続きで盛り上がる神学生達の英語やその他、彼らの話すジョークもわからず、溜息を漏らす日々でありました。最初の学期に「はつきり言つて、今のあなたにはここでの学問は無理だ」と言われたことは今でも覚えています。留学前に聞いた色々な留学生の成功談とはまったくかけ離れた自分がそこにいて、自分のこの英国での時間は何なのだろうか、意味があるのだろうか、と思ひ悩みました。日本が恋しいと毎日思っていました。海外に憧れる日本人から見れば、英国留学をする、英国で生活することは、非常に恵まれているように映るでしょう。しかし、留学後、しばらくの間は敗北感しか残っていませんでした。

しかし、今となつては、自分は何に對して敗北感を感じていたのだろうか、と思います。勉強すること、学ぶことは、自分自身を研鑽させていくためであり、他の人と比べるためではない。親のためでもない。他者の期待に答えるためでもない。これまでの自分から新しい自分に変えられて成熟していくためであり、敗北感を感じる必要など全くない、そう思うようになりました。



自分の挫折を通して自分自身を知りました。自分の脆さや弱さを知りました。素直にありのままの自分を認めて、背伸びして生きることから自由になる機会を得ました。苦しみや挫折の中心は異なっても、それによって失望している人の思いを知ることができるようになりました。また、絶えず学び続けることの大切さを知りました。留学中に読んでいた本を開くと単語の意味の書き込みで真っ黒だらけになっていた。でも、今、改めて読みながら知っている単語を消しゴムで消していくとどんどん白くなる。他の人にとっては大したレベルではないかもしれない。だけど、以前よりも少しずつ知っている単語が増えてきている。自分のペースで焦らずにコツコツと学んでいけばいい、そう思えるようになった。学習は生涯をかけてするものであり、学院の生徒達も今の結果、成績に一喜一憂せず、目的を持って学び続けて

欲しいと思います。わたしたちの人生はいつ、どこで本当の花が咲くかはわからないからです。

教会のカレンダーでは今の時期はレント(大齋節)という時期です。十字架の道行きの前に苦悩するイエス・キリストに目を留めます。また、十字架の死によって、イエスという大切な存在を失い、これまでの人生は何だったのだろうかと挫折し、苦悩する弟子たちの姿に目を留めます。そして、その先にあったキリストの復活の恵みを祝い、その恵みに喜ぶ弟子達の姿に目を向けます。

レント(Lent)とはアングロサクソン語の「レンクテン(Lencten)」という語から派生したものと言われていますが、その意味は「春」であり、「(草花の芽が)伸びる」という語と同じ語根を持つそうです。わたしたちが体験する様々な苦しみ、挫折の中でも神様は恵みの水、光を注いでいる。人生の中にある苦しみ、挫折には隠された意味があり、苦しみや挫折を通して豊かにされ、成長し、その先にある喜びに与れることを聖書は伝えてくれます。

皆様の上に神様の豊かな恵みと慈しみが注がれますように祈りしております。

